

本研究は、病とそれがもたらす大量死がどのように語られていったかを考察するために、18世紀後半から19世紀半ばにかけてのハワイ諸島についてのイギリス人による英語記述を事例として考察したものである。

王立協会は北西航路発見のため、ジェームズ・クックの調査隊を第3回世界一周航海に送り出した。1778年クック隊は冬越しのため、ヨーロッパ人として初めてハワイ諸島（クックはSandwich Islandsと命名）に上陸した。

ここではクック上陸から19世紀にかけての、ハワイの人口減とその主な原因と考えられる伝染病（感染症）のまん延の過程を時系列に追いながら、ハワイに関する英語による言説がどのように変化していったかを見ていく。

## ハワイの歴史とヨーロッパ人の来訪

13世紀頃 ニューゼーランド、クック諸島、マルケサス諸島などからハワイ諸島への移住が起こる（社会・文化的に近い人々の集団移動）

1778年1月20日 クック隊はカウアイ島に上陸。船員の中に性病の者があり、現地の女性との交流禁止命令が出るが、命令違反で多くの船員が処罰されることになる。クック隊北極海へ航路探索に出発。冬にハワイへ戻る。

1778年11月 マウイ島で性病を訴える現地の人が乗船する。  
…and in the end that it will appear it has been we ourselves that has entailed on these poor, Unhappy people an everlasting and Miserable plague.(Cook, III, 1, 475)

1778年のハワイ諸島の人口40万人（キャプテン・キングによる推計値 現代ではそれ以上の人口であった可能性も指摘されている）

1779年2月 クック、ハワイ島ケアラケア湾で現地の暴徒に殺される。

1792年 クック第2、3回航海に同行したジョージ・バンクーバーが、アメリカ北西部探索のためハワイへ。ワイキキが廃村となり、ワイメア湾の集落は規模が縮小していた。バンクーバーはカメハメハと信頼関係を結び、ハワイをイギリスの保護領とすることを約束する（イギリスからの承認は受けていない）。

At Whyteeta[Waikiki] I had occasion to observe that, although the town was extensive, and the houses numerous, yet they are thinly inhabited, and many appeared to be intirely[sic] abandoned. The village of Whymea[Waimea] is reduced at least two-thirds of its size, since the year 1778 and 1779.(Vancouver, 2, 477)

1809年 翌年まで A. キャンベルがハワイに滞在。ハワイ諸島を掌握していたカメハメハ一世の保護を受け、彼の船を修理する。

## キリスト教布教以後の変質する社会

1820年、イギリス宣教師協会がハワイに 人口見積もり15万人ほど イギリスやアメリカからの伝道および、捕鯨船の寄港などによって、ハワイには多くの外国船が入港するようになり、次々と伝染病がもたらされた。クック隊が去った後の多くの人が死んだことは「恐ろしくて語れない」と現地の人と話したと伝わる。1804年頃にはコレラの大流行があった。

1896年の国勢調査では、ハワイ諸島にヨーロッパ人が到来した時期よりも前から住んでいた人々の子孫と考えられる人々は、3万人であった。



ワイメア湾の眺め From Hiram Bingham, *Residence for Twenty-one Years in the Sandwich Islands*, 1848.

以下は、ハワイに関する記述のうち、主要な旅行記や報告をもとに編集されたと考えられる『ブリタニカ百科事典』（以下、版と出版年のみ明記）および同時代の旅行記を参考に、ハワイがどのように描かれたかを紹介する。ハワイの人口減に比例して、ハワイの社会の規律や伝統が失われていった。

## <楽園のハワイ>

1780~1790年代：クックの死はイギリスの人々に衝撃を与えたが、彼の世界航海でもたらされた地理的情報や科学的航海術の進歩を称賛するムードは強く残っていた。ハワイの人々は友好的な人々として描かれ、作物が豊かな土地で農業や工芸に長け、自足して暮らしている様子が描かれている（3版, 1797）。3版には特産品として塩が挙げられており、後年バンクーバーは地中から湧き出る海水を利用した天日塩の生産所を見学した。

## <キャンベルの旅行記>

1800~1810年代：負傷してハワイに滞在（1809-1810）したキャンベルの旅行記は、宣教師がハワイに上陸し文化的矯正を試みる前の、カメハメハ一世の統治時代を伝えるものである。ハワイで見聞した葬儀の儀式や稀に起こる刑罰の様子は、灌漑農業の様子やハワイの人々の風習や清潔さ、酒の醸造を伝えた脱走者などの記述の間に登場する。当時カメハメハが拠点であったハワイ島ではなくオアフ島に王宮を築いているのは、戦争および病による大量死が統治の形を変化させたとも推測できる(Campbell)。

## <「未開」の人々>

1820年代～：ハワイの人々の風俗習慣が「未開」のものであり、多くは唾棄すべきものであるといった先入観が見え隠れする記述は、『ブリタニカ』補遺版（1824）から見られるようになる。キャンベルの旅行記の中から、墓所を荒らした犯人の目をくりぬいた話のみが抽出され、自分の物にさえ触れることを禁止されるタブーの風習から、所有の感覚が薄く（“By means of it[taboo], a whole people is contended to be robbed of their property.”）女たちは淫猥であると記述している。これらはすべて残酷であるかキリスト教からみて背徳的な事項であり、ここにハワイの人々の社会と文化を理解しようとする態度は見られない。

## <ハワイは悪徳とともにある>

1830年代～：おそらく1830年代に改訂されたと考えられる第7版（1842）の記述には、人口は13万人から40万人と各種意見が掲載されているが、同時代のハワイ滞在記に散見する、休耕地や集落の遺跡など人口減を示すものへの言及はない。グロテスクで恐ろしい木彫りの彫像を崇拝する現地の人々は、道徳的に腐敗した存在として示唆されており、当時の社会的文脈から見れば、語るべきものから目をそらし本質を曖昧にする悪質なレトリックの一つとも読みうるだろう。

The ancient system of idolatry was calculated to operate on the fears of its votaries... Grotesque and horrible wooden figures, animals, and the bones of chiefs, were the objects of worship... The characters of these islanders, like that of all savages in their natural state, is stained with every degrading vice. (7th, 1842)

## <考察>

本事例は、病を語る（もしくは隠匿する）者たちと病と死を背負わされた者たちとの文化、社会上の権力関係が明白な事例である。ここでは、語る力を持った人々は、病をもたらした人々でもあった。そして語る力を持つことは、病がまん延した社会の大量の死を語らない権利をも持つことを意味した。ハワイの疫病に関する真摯な考察は、20世紀の終わりになって登場するが、今は失われた古いハワイの事柄から分かることは、自らの社会の病と死を語り継ぐ知恵と力を持つことは、その社会の存続にも寄与することであると考えられる。



ハワイの神像 From *History of the Sandwich Islands* by American Mission, 1831.

Abbreviations: Cook (*The Journal of Captain James Cook*, ed. J. C. Beaglehole, 3, part1); Vancouver (George Vancouver, *A Voyage of Discovery*, ed. Kaye Lamb, 2); EB (*Encyclopedia Britannica*); Campbell (Archibald Campbell, *A Voyage Round the World*, 1816)